

P-7-58

臨床工学技士向けインターンシップの検討

諏訪赤十字病院 医療技術部 第一臨床工学技術課

○宮川 宜之、松田 祐汰、花岡 和也、佐藤 逸平

【緒言・目的】入職前後の理想と現実のギャップに悩むことを「リアリティー・ショック」と呼び、新入職員の6割以上が感じているとも言われている。早期離職の原因になることから、当院では2015年よりインターンシップを開催し、「リアリティー・ショック」の軽減に取り組んだ。今回、これまでに開催したインターンシップの状況から、効果と課題を検討したので報告する。【方法】2015年から2019年までに開催したインターンシップの学生の参加状況、応募状況と実施後のアンケート結果を検討する。【対象】臨床工学技士を目指す学生(当院への就職希望は問わない)【プログラム】オリエンテーション、病院見学を実施後、受講者を2-3名のグループに分けて職業体験を実施する。体験は(1)医療機器管理(2)血液透析(3)補助循環(4)人工呼吸器の各分野に関連した内容としている。その後、災害救護車両や当直室の見学、職務経験の少ない若手臨床工学技士の談話を設定している。【結果】受講者数は、2014年度2名(応募2名中)、2015年度8名(8名中)、2016年度10名(10名中)、2017年度12名(17名中)、2018年度11名(23名中)であった。回収した33名のアンケート結果において、全ての参加者が「役に立った」「やや役に立った」と回答した。【考察】受講希望者は年々増加しており、アンケート結果ではインターンシップの目的達成という点で良好な結果を得た。しかし、受講希望者が定員を上回る状況が続いていることから、開催回数を増加する等の対策を検討する必要があると思われる。【結論】インターンシップは臨床工学技士を目指す学生にとって、入職後の業務イメージにより明確にし、リアリティーショック軽減に寄与すると考えられた。

P-7-60

間欠的空気圧迫装置の中央管理運用を開始して

日本赤十字社和歌山医療センター 医療技術部 臨床工学技術課¹、
腎臓内科部²

○前田 充徳¹⁾、中山 瞳¹⁾、堅元 将己¹⁾、西村 絵里¹⁾、
山田 晴基¹⁾、吉崎 泰平¹⁾、名田祐一郎¹⁾、松本 真季¹⁾、
城 崇友¹⁾、米田 裕一¹⁾、中谷 晋也¹⁾、南村 秀行¹⁾、
山下 繁¹⁾、森脇 敏成¹⁾、小川 昌彦¹⁾、東 義人¹²⁾

【はじめに】当センターでは、肺血栓塞栓症・深部静脈血栓症の予防に、間欠的空気圧迫装置(以下フットポンプ)を使用していたが、管理は各病棟で実施してきた。今回、中央管理運用を開始して、効率的な運用を実現することが出来たので報告する。【方法】中央管理運用を開始するにあたり、機種の一掃を行った。またスリーブもディスプレイとした。保管場所は、手術室、集中治療室、医療機器中央管理室とし、手術患者への使用は手術室から貸出することにした。手術以外の患者への使用は集中治療室、医療機器中央管理室の装置を使用することにした。運用管理は医療機器管理ソフト Me-Tomass2 prototype を用い、使用時、使用開始者が患者紐付けと、使用前点検を行い、使用後は使用履歴を確認することにし、電子カルテに効率的に記録を保存するよう工夫した。使用後は医療機器中央管理室に返却され、清掃、メーカ推奨の使用後点検を施行する。使用履歴から管理台数の見直しも適宜行うこととした。【考察及びまとめ】フットポンプの中央管理を開始し、機種統一によるランニングコストの抑制、電子カルテへの使用履歴、使用前点検、使用後確認の効率的な記録、使用後の清掃、点検を実施するなど衛生面、安全性の向上、機器稼働率の向上を期待することが出来た。

P-7-62

当院におけるシングルニードル透析の経験

広島赤十字・原爆病院 腎臓内科部¹⁾、
広島赤十字・原爆病院 医療技術部 臨床工学課²⁾

○浅井真理子¹⁾、野口 真路¹⁾、尾上 桂子¹⁾、曾爾浩太郎¹⁾、
藤川 亮²⁾、土屋 享子²⁾、葛本 昌志²⁾、松島 安幸²⁾、
横山 敬生¹⁾

【はじめに】血液透析患者のバスキュラーアクセスにおいて、透析に十分な血流を得ると同時に、別の返血用静脈を確保することが必要であり、それらの血管を確実に穿刺できることが必須である。しかし近年の患者の高齢化と糖尿病の増加などにより、バスキュラーアクセス発達度が不十分な症例、ならびに穿刺困難な症例が増加している。シングルニードル透析は、穿刺針を1本のみ用いて脱血と返血を交互に行う治療モードである。当院におけるシングルニードル透析の施行例について報告する。【方法】当院でバスキュラーアクセスを作製し血液透析を導入した患者のうち、導入時に血管発達度が不十分で2ヶ所の血管穿刺が困難であった11症例、および限外濾過のみであった1症例に対しシングルニードル透析を施行した。シングルニードル透析機能を備えた血液透析監視装置(DCS-100NX-NIKKISO)、血液透析回路(NIKKISO)、ダイヤライザー、透析穿刺針(Argyleメデイカトセーフティカニューラ 17G; COVIDIEN)、Yコネクター(シエフフローN:NIPRO)を用いて透析回路を構成した。1ヶ所の穿刺針留置は全症例で比較的容易であり、最終的には全症例で2本穿刺が可能となった。【結論】血液透析導入期や穿刺困難症例などにおいて、シングルニードル透析は穿刺失敗による血管の荒廃を防ぐ、あるいは穿刺時の患者の苦痛を軽減する点で有用である。

P-7-59

病院機能評価の受診と、病院新築移転を経験して

芳賀赤十字病院 臨床工学技術課

○廣瀬 猛¹⁾、櫻井啓一郎、島田 俊昭、関川 和也、新部 武人

当院では病院機能評価で、電子血圧計、ベッドサイドモニター、Spo2モニターの定期点検と点検装置による管理を、校正器による点検を行っているか、どうかの指摘があり、今後購入時から、校正器に適合する電子血圧計とSpo2モニターの購入を進めて行き、年1回の定期点検を院内で行う。Spo2の校正器は、約100万円と高価であり、校正器の校正も年1回必要であり、医療機器管理の面で校正器の購入もコストが高く難しい。今後の医療法改正で管理方法の指摘も厳しくなり、特定医療機器以外の機器での精度管理が問われる場合が多くなり、コスト削減の方法として、校正器の協同購入も検討していただくとありがたい。病院新築移転に関しては、マスク型人工呼吸器V60装着の患者さんの移動距離が旧病院から新病院まで2Km、時間にして約20分を想定し、事前にスタッフがV60を装着しFIO2 100%の設定で500L2ボンベが何分動作するか検証を行い、高規格救急車に移動を行ったので報告する。

P-7-61

輸液ポンプの病棟プールに対する注意喚起のために行った調査の解析

北見赤十字病院 臨床工学課

○かわくち ひろみ、弘美、森田 誠悠、伊藤 義和、大山 知明、相原 正幸、
景山 貴信、好井 透

【はじめに】現在、汎用ME機器については臨床工学技士による中央管理が行われている施設が多くなってきていると思われる。当院でも20年以上前より自動ポンプの管理から初め、今では数十機種、数百台の機器管理を行なっています。その機器管理の中で他施設からもよく聞く問題点の一つとして輸液ポンプの貸出先でのプール(予備機の蓄え)があげられると思います。今回はプールの現状を明らかにするために行った調査について考察しましたので報告いたします。【調査方法】返却された輸液ポンプについて貸出システムから貸出日時と装置操作履歴機能から貸出日時後の1回目の電源オン日時を抜き出して貸出先プール期間を算出しました。また貸出先による貸出期間の傾向を知るために昨年1年間の全部署の平均1回貸出期間も合わせて貸出システムから検索しました。【結果】調査した400件の平均プール期間は70時間、一般病棟での平均プール日数が一番長かったのが小児科で4.7日、次いで産科で2.7日、循環器病棟で2.5日でした。最長プール期間は15日間でした。昨年1年間の輸液ポンプの貸出返却回数は6829回、総貸出日数が65062日で平均貸出期間は11.2日間、一般病棟での最長貸出期間は106日間でありました。【考察】当院では夜間帯は事務当直が貸出機器を持ってきてくれる体制を取っているが自分の部署は緊急性があり特別と思っていそうな部署がプール時間の長い順位のトップ3で小児科、産科、循環器と言った結果は予想通りであった。【まとめ】今後、この調査結果を看護部に報告しプール台数の減数に取り組むと同時に、数年前行って訴えている一患者一使用一返却運動が思ったほど浸透していないということがわかったためより一層の周知活動に取り組むも所存です。

P-7-63

内視鏡手術業務参入の報告 ~臨床工学技士によるスコピスト・PA業務~

沖縄赤十字病院 医療技術部 臨床工学課¹⁾、

沖縄赤十字病院 副院長 兼 外科部長²⁾

○友寄 隆仁¹⁾、佐野 詩乃¹⁾、上間 勇輝¹⁾、宮城 淳²⁾

【はじめに】近年、内視鏡外科手術件数は増加の一途を辿っている。それに伴い外科医師の業務量は確実に増加し、手術助手及びスコピストが不足している。これは術者の手技増加に直結し、術中の集力低下につながる。延いては術中の誤認識、手技ミス、機器トラブルなどインシデント・アクシデントを起こす危険性も高まる。医師の業務負担軽減が叫ばれている中、タスクシフトあるいはタスクシェアの重要性は増している。内視鏡手術業務としてスコピストを含む医師補助(Physicians assistant 以下PA)業務は術者が本来の術者技に集中できる環境を提供すると共に、安全な手術の迅速に大きく貢献する業務である。【目的】内視鏡手術業務に参入スコピストおよびPA業務を開始し、1年が経過したので以下に報告する。【結果】計233件(月平均19.4件)の内視鏡手術に携わり業務時間は合計918時間(1件当たり平均3.95時間)であった。【考察】スコピストは術者の視覚の役割を果たすため、術者が必要とする視野を瞬時に提供しなければ術者は大きなストレスを感じる。また、その他PA業務においても術式、トロッカ挿入・開・閉補助、視野確保のための方法などの手技を把握していなければスムーズな手術進行はありえない。更に、「できないこと」や「わからないこと」「普段と違うと感じること」などを医師や看護士に気負うことなく発言し、情報を共有し、共に考えるといった、いわゆる「ノンテクニカルスキル」が安全な手術遂行のためには重要となる。このような環境、意識下で本業務を行うことは高い注意力・集中力・洞察力が必要であり、今後いかに他のスタッフへの教育を行っていくかが課題である。

一般演題(ポスター)抄録
10月18日(金)